

低出生体重児と両親へ導入したカンガルーケアの効果

森藤香奈子¹・宮原 春美²・宮下 弘子²

要 旨 N大学病院で実施している低出生体重児とその家族への育児支援のひとつであるカンガルーケアに焦点をあて、その効果について検討したので報告する。

研究対象はN大学附属病院小児科未熟児室に平成12年5月から平成12年8月に入院した子どもの中で、研究期間内にカンガルーケアが可能な状態であり、長期入院が予測された子どもとその両親5組である。

研究対象に対し、カンガルーケア実施前後の気持ちをアンケート調査した。調査内容は、1. 子どもに対面する前の気持ち、2. 初めてカンガルーケアを行った時の気持ち、3. カンガルーケアを行うようになってからの気持ち、4. カンガルーケアについてどう思うか、とした。

分析方法は、アンケートの記述内容から気持ちの変化について述べている部分を抽出し、カンガルーケアの効果について考察した。

母親へのアンケートの結果、子どもに対面する前の気持ちでは、不安が表現された記述であった。初めてカンガルーケアを行った時の気持ちでは、不安が軽減され、肯定的な感情へ変化していた。カンガルーケアについては全員が好意的にとらえていた。

父親へのアンケートでは、母親のように直接的な表現ではないが、初めてカンガルーケアを実施した時の喜びを表現し、カンガルーケアに対して良い印象を持っていた。

一方で長期にカンガルーケアをできない母親に対しては細かな配慮が必要である。

長崎大学医学部保健学科紀要 17(2): 53-57, 2004

Key Words : カンガルーケア, 低出生体重児, 両親, 親子関係

I. はじめに

女性は妊娠中より胎児の存在、成長を身体で感じ、精神的にも身体的にも母親になるための準備がなされ、出産後子どもと触れあうことで喜び幸せを感じ、母と子の絆を深めていく。しかし低出生体重児を出産した場合、妊娠中の母親への準備の途中で出産となってしまう、満身に産んであげられなかったという罪悪感と悲しみ、子どもの生存や成長に対する母親の不安は計りしれないものである。また出生直後は、一生涯でもっとも濃厚な親子の関わりをもつ時期である。このような時期に母子分離を余儀無くされることは、母子関係に大きな影響を与えると考えられる。

最近、新聞やテレビなどで悲惨な虐待が増えてきている。とくに低出生体重児やNICU退室児は、近年のデータでも虐待の頻度が高いことが示されている¹⁾。また核家族化が進む今日、昔のように身近に乳幼児がおらず初めて接する乳幼児が我が子であるという母親も多く、育児に不安ととまどいを感じる母親も多い。そのため子どもが元気に退院することと共に両親が子どもの存在を認め、良い親子関係が形成されるように早期より適切な援

助を行うことが大切である。

N大学附属病院小児科未熟児室では低出生体重児と母親のケアとしてカンガルーケア、母乳育児支援、退院前母子同室を取り入れている。カンガルーケアは本来コロンビアのボゴダで始まったケア方法であり、保育器不足のため乳児の保温を目的として母親の皮膚と児の皮膚を接触させるケアであるが、日本では、母(父)子の愛着形成や早産による精神的ストレスを克服するといった心理的な意味合いで行われている²⁻⁴⁾。今回、N大学病院で実施している低出生体重児とその家族への育児支援のひとつであるカンガルーケアに焦点をあて、その効果について検討したので報告する。

II. 研究方法

1. 研究対象

研究対象はN大学附属病院小児科未熟児室(以下、未熟児室と略す)に平成12年5月から平成12年8月に入院した子どもの中で、研究期間内にカンガルーケアが可能な状態であり、長期入院が予測された子どもとその両親5組である。事例の背景を表1に示す。

1 長崎大学医学部・歯学部附属病院

2 長崎大学医学部保健学科看護学専攻

表1. 事例のプロフィール

| 事例 | 在胎週数 | 出生体重 | 入院日数 | 早産の原因 |
|----|-------|--------|------|------------|
| 1 | 27週2日 | 1040 g | 125日 | 常位胎盤早期剥離 |
| 2 | 33週0日 | 1106 g | 53日 | 妊娠中毒症 |
| 3 | 30週2日 | 1160 g | 67日 | 切迫早産 |
| 4 | 29週1日 | 1054 g | 77日 | 妊娠中毒症 |
| 5 | 37週1日 | 1460 g | 39日 | 早期破水, 分娩進行 |

2. 研究方法

1) カンガルーケアの実施方法

未熟児室では初めて子どもに触れた時の気持ちを大切にしたいと考え、カンガルーケアを行う前に説明はしない。母親に直接授乳の介助をするように衣服の前を開けてもらい、そのまま母親の胸部におむつだけ着けた子どもを腹臥位にして抱っこさせ、その上からバスタオルで保温する。子どもの状態がよければ、初回面会時に母親にカンガルーケアを実施する。そして入院期間内を通して、面会時間中はほぼ毎回カンガルーケアを実施してもらった。

また5事例中3事例については、父親にもカンガルーケアを実施してもらった。父親の場合も母親と同様の方法で行った。

2) 調査内容

カンガルーケア実施前後の気持ちをアンケート調査した。調査内容は、1. 子どもに対面する前の気持ち、2. 初めてカンガルーケアを行った時の気持ち、3. カンガルーケアを行うようになってからの気持ち、4. カンガルーケアについてどう思うか、とした。

3) 分析方法

アンケートの記述内容から、対面前からカンガルーケア実施後の気持ちの変化について述べている部分を抽出

し、カンガルーケアの効果について考察した。

III. 結 果

1) カンガルーケア実施による母親の気持ちの変化

母親から得られたカンガルーケア導入前後の気持ちを表2に示す。

事例1は常位胎盤早期剥離のため27週2日、体重1040gで出生した子どもである。事例1は出生より40日間レスピレーター管理されており、早期のカンガルーケアができなかった例である。母親は、長期間抱っこできなかった時の気持ちを「他の親子のカンガルーケアをうらやましいと思ったが、人工呼吸器を装着しているわが子を見てこのまま生き続けられるのか、抱っこできる日が来るのか恐かった。」と振り返った。生後49日目に初回カンガルーケアを行ったときのことを「弱々しいと思っていたわが子が、思ったより重く感じられ温かかった。」、「一生忘れられない日。とてもとても嬉しかった。」と感動し、「長い間抱っこできない母親によってカンガルーケアはとても大事で、不安な気持ちを救ってくれる。」と感想を述べた。また子どもの呼吸状態が不安定でカンガルーケアができない日があったり、カンガルーケア中にSpO₂の低下があり中断したり、時間を制限して酸素を使用しながらカンガルーケアを行ったりするエピソードがあり、その状態を脱し面会時間いっぱいカンガルーケアができるようになったとき、「毎日ドキドキでした。いろいろあったけど、今は安心して抱っこできます。」と述べた。

事例2は妊娠中毒症のため帝王切開し、33週0日、体重1106gで出生した子どもである。対面前には「体重が1000gちょっとということまで心配していたが、術後2日目からカンガルーケアを実施したところ、その間だけ痛

表2. カンガルーケアについてのアンケート結果 (母親)

| | 子どもに対面する前の気持ち | 初めてカンガルーケアを行った時の気持ち | カンガルーケアを行うようになってからの気持ち | カンガルーケアについてどう思うか |
|-----|--|---|--|--|
| 事例1 | 対面するのがとても怖かった。会いたいけど会ったら自分がどうかなってしまいそうだった。 | 思ったより重く感じられ、温かかった。 | 酸素をしながらだったり、状態が悪くなったりいろいろあったけど、今は安心して抱っこできる。 | 短時間しか抱っこできない母親にとっても良いことだと思う。でも長い時間抱っこできない母親へのケアもとても大事だと思う。 |
| 事例2 | 障害があるのではないかと心配した。 | 術後2日目で痛みがあり短時間だったが、その時間痛みを忘れることができた。 | 入院中一緒にいるわけではないのでほんとに赤ちゃんがいるのかなという気持ちになった。カンガルーケアをして愛情がわいてきた。 | 赤ちゃん直接肌と肌に触れ合うことは良いことだと思います。 |
| 事例3 | 赤ちゃんに会える日が待ち遠しかった。 | 生まれたての我が子の肌が触れた時、かけがえのない命がここににあると思うと、思わず感激して涙があふれた。 | とまどいと不安が安らいだ。母親としての実感が出てきた。 | 赤ちゃんとのコミュニケーションには、一番良いことだと思う。 |
| 事例4 | 早く会いたかった。小さく産まれたので心配だった。 | 思ったより小さくて壊れそうで怖かったが、動かす手足の動きが直接感じられて安心した。嬉しかった。 | 普通の抱っこより赤ちゃんに早くなれたような感じがする。怖くなくなった。 | 良いことだと思う。とても温かくて気持ちいい。 |
| 事例5 | 体が丈夫で元気に産まれたか心配だった。早く会いたかった。 | すごく温かくて元気そうだったので安心した。びっくりしたけど抵抗なくできた。 | 肌と肌でふれあっているからお互い安心していると思う。 | 服を着ている時よりも、子どもが安心している感じが伝わってきて、親として落ち着いた気持ちでいられる。 |

表3. カンガルーケアについてのアンケート結果（父親）

| | 子どもに対面する前の気持ち | 初めてカンガルーケアを行った時の気持ち | カンガルーケアを行うようになってからの気持ち | カンガルーケアについてどう思うか |
|-----|----------------------------|--|---------------------------------|---------------------------------|
| 事例1 | ドキドキしました。 | とても軽かったけど、緊張して腕が疲れました。 | カンガルーケアをするようになって安心した。 | とても良いことだと思う |
| 事例2 | 未熟児ということで人間の形をしているのか不安だった。 | 首のすわっていない赤ちゃんを抱いたのが初めてで驚いた。赤ちゃんの温かさを感じ親近感を持ちました。 | 直接抱くことで、確かに赤ちゃんを身近に感じることができる。 | 赤ちゃんに対して無理がないのなら、親としては良いことだと思う。 |
| 事例3 | 記載無し | 嬉しかった。気持ちよかった。 | かわいいので毎日でもカンガルーケアをしたいと思うようになった。 | 赤ちゃんとのコミュニケーションには一番良いことだと思う。 |

みを忘れることができた。」と述べ、「一緒にいて世話をするわけではないので、ほんとに赤ちゃんがいるのかな、という気持ちになったりしたが、カンガルーケアを行うことにより愛情がわいてきた。」と述べた。

事例3は切迫早産のため30週1日、体重1600gで出生した子どもである。初産で出産に対する不安な気持ちを持ったまま早産となり、しかもすぐに赤ちゃんとの面会できず心配していたが、カンガルーケアをはじめて行った時の気持ちを「生まれたての我が子の肌が触れた時、かけがえのない命がここにあると思うと思わず感激で涙があふれた。」と述べた。

事例4は妊娠中毒症のため29週1日、体重1054gで出生した子どもである。「小さく産まれて大丈夫か」と心配だったが、はじめてカンガルーケアを行った時、「思っていたより小さくて壊れそうで怖かったが、動かず手足を直接感じられ安心し嬉しかった。」と感想を述べた。またカンガルーケアをおこなうことで「普通の抱っこより赤ちゃんに早く慣れたような感じがする。怖くなくなった。」と述べた。

事例5は37週2日、破水のため分娩進行し体重1460gで出生した子どもである。「体が丈夫で元気に産まれたか心配だった。早く会いたかった。」と述べたが、カンガルーケア実施後「すごく温かくて元気そうだったので安心した。」と述べ、カンガルーケアについては「服を着ている時よりも子どもが安心している感じが伝わって、親もとても落ち着いた気持ちでいられる。」と述べた。

以上の症例より、子どもに対面する前の気持ちは「早く会いたかった」、「心配だった」、「怖い」など母親の不安が表現された記述であったが、初めてカンガルーケアを行った時の気持ちは、「重み」、「暖かみ」、「動き」など肌で感じることを通して「安心した」、「嬉しかった」、「感激した」、「痛みを忘れた」と不安が軽減され、肯定的な感情へと変化していたことがわかった。

さらに、継続してカンガルーケアを行うことで「母親としての実感がわいた」、「愛情がわいてきた」、「安心できる」と表現されており、カンガルーケアについては全員が「良いことである」、「落ち着いていられる」と好意的にとらえていた。

しかし早期のカンガルーケアができなかった事例1で

は、ほかの家族の状況が見える環境で過ごした体験から、「長い間抱っこできない母親に対するケアもとても大事」と述べた。

2) カンガルーケア実施による父親の気持ちの変化

5事例中3事例に対して父親にカンガルーケアを実施し、母親と同様のアンケートを実施した。父親から得られたカンガルーケア導入前後の気持ちを表3に示す。

事例1では、子どもに対面するまで「ドキドキしました。」と話し、初めてカンガルーケアを行った時のことを「とても軽かったけど、緊張して腕が疲れました。」と述べた。また長期間抱っこできなかった時のことについて「しかたがないと考えるしかなかった。」と述べた。カンガルーケアについては「カンガルーケアをするようになって安心した。」「とても良いことだと思う。」と述べた。

事例2では子どもに対面する前に「未熟児ということで人間の形をしているのか不安だった。」と述べていたが、カンガルーケアを実施して「首のすわっていない赤ちゃんを抱いたのが初めてで驚いた。赤ちゃんの温かさを感じ親近感を持ちました。」と感想を述べた。カンガルーケアに対しては「直接抱くことで、確かに赤ちゃんを身近に感じる事ができる。」「赤ちゃんに対して無理がないのなら、親としては良いことだと思う。」と述べた。

事例3では、初めてカンガルーケアを実施した時のことを「嬉しかった。」「気持ちよかった。」と述べた。またカンガルーケアについて「かわいいので毎日でもカンガルーケアをしたいと思うようになった。」と述べた。

3事例とも母親のように直接的な表現ではないが、初めてカンガルーケアを実施した時の喜びを表現し、カンガルーケアに対して好印象を持つことがわかった。

IV. 考 察

両親、特に母親は我が子を小さく産んでしまったことに対して自分を責め、子どもの将来に大きな不安を持つ。母親へのアンケートの中でも、子どもに対面する前の気持ちについて「怖かった」、「体が丈夫なのか心配した」、「障害はないのか」、「どんなに小さいのか」など不安を表現したものであった。そして、その不安は初回カンガルーケアを実施したときに、子どもの「重み」、「動き」、「温かさ」が肌を通して感じられたことで軽減できてい

た。また、カンガルーケアを継続して行ったことで「愛情がわいてきた。」、「お互いに安心していると思う。」と述べていた。ボウルヴィ⁵⁾は乳児の愛着行動が強く活性化されると、特に要求されるのは身体的接触であり、さらに単なる接触より新生児の把握反射を起源とする「しがみつき」を伴う接触の行動が母子の接近を維持するための信号機構として重要であると述べている。カンガルーケアは、子どもの把握反射を母親が直接肌を通して感じるができるものであるといえ、今回の5事例でも接触体験によって愛着形成が促進されたと考える。

また本来、子どもは出生直後より母親と共に過ごし、母親や家族との信頼関係を築いていくものである。しかし低出生体重児の場合、出産直後より母子分離を余儀なくされ、母子共に一番感受性の高い、母子の絆を深めるための最も大切な時期を経験できない危機的状態にあるといえる。事例2では母親が「一緒にいて世話をするわけではないので、ほんとに赤ちゃんがいるのかなという気持ちになった。」と述べていた。ハーロウ⁶⁾はサル「隔離飼育」で「社会的経験」、「養護経験」の剥奪について述べている。低出生体重児の未熟児室入院という状況ではまさしく家族と隔離された生活環境は子どもにとって「社会的経験」の剥奪であり、保育器収容による子どもと家族の「触経験」の剥奪、そして分離状態は家族にとっての「養護経験」の剥奪ともいえる。事例2では「カンガルーケアをすることで愛情がわいてきた。」とも述べている。カンガルーケアは、親としての自信の回復、そして「この子の親としての自分」を確認する過程で重要な役割を果たしていると考えられる。

一方で事例1のように、早期にカンガルーケアをできない場合のケアも重要である。同じ未熟児室内で他の親子は抱っこし、授乳しそれを介助している看護師の様子を、事例1の母親は「うらやましい」と表現している。本来なら、他の親子と同じように抱っこして授乳できるはずである。それができないのは自分が小さく産んでしまった、満足に抱っこもできない状況を作ってしまった自分を悔やみ、責め、子どもの生命の不安に苦しむ様子が表現されていると考える。容易に他の家族と比較できる環境であることを配慮しなくてはならないと考える。また呼吸状態の変化も激しく、カンガルーケア中にSpO₂の低下があり中断したり、時間を制限されたり、その日の呼吸状態でカンガルーケアができなかったりしたエピソードもあり、カンガルーケアそのものに不安を感じていた可能性もある。カンガルーケアを導入した母親の感情に対する研究⁷⁾では、カンガルーケア中に体色の変化があった場合の母親のフォローの重要性が述べられており、事例1の場合も子どもの状態の変化に的確に対応し、母親の不安が増強しないように援助する必要がある。

しかし事例1でも、カンガルーケア後「生きている私の子ども」を肌と肌がふれあうことで感じ、その重さを

「命の重さ」として実感できたことが不安の軽減につながったと考えられ、効果的であったといえる。それは長期間の接触体験の剥奪があったからこそ母親の感動が大きく、その間に継続してあった不安が軽減されたのではないかと考える。

カンガルーケアを行ったとき、その母親がどのように感じるかを大切にしながら、優しく声をかけ、母子を見守る看護が必要であると考えられる。看護師は触れあった感激を共感し、母親と一緒にかわいい子どものために何が必要かを一緒に考えていくことが大切である。カンガルーケアによって母子分離という危機的状態から母親が子どもをより身近に感じるができる。それは看護師から伝えるものではなく、母親が直接子どもから感じ取れるように関わる必要があると考えられる。

父親に対してカンガルーケアを導入したことは、これまで述べてきた母親の不安を一緒に支え、より子どもを身近に感じてもらうことを目的としている。男性にとっても父親になるということは多くの学習が必要となる。ラ・レーチェ・リーグ⁸⁾は、母親は赤ちゃんの誕生と同時に「母親らしさ」が生まれるといわれているが、父親はもっとゆっくりと父親としての自分の役割に目覚めると述べている。子どもができたといっても、自分の身体でそれを実感するわけではなく、その事実から親としての責任と義務を感じ、出産までの間に準備を整えていかなくてはならない。

また、子どもと多くの関わりを持ちながら愛着を形成して父親としての実感がわいてくるものである。ましてや、子どもが早産児、低出生体重児である場合は、その準備段階での出産であるため父親も動揺した状態で父親としての役割を要求される。また、仕事の都合でなかなか面会に来れなかったり、面会に来て授乳の練習をしている子どもと母親を側で見て、それが終わってから短時間の抱っこを経験するという場合が多い。子どもとの愛着形成の機会は制限される一方で、父親としての役割は十分に期待される。そのような状況で父親にカンガルーケアを勧めても抵抗を示すことが多い。父親が子どもの出生早期に肌と肌を直接ふれ合わせて抱っこすることはほとんどない。

事例2では、父親が「人間の形をしているか不安だった」と表現している。すでに二人の子どもを持つ父親であったが、早産であり、低出生体重児であったことに大きくとまどい、不安を持っていたことがわかる。カンガルーケアを行ったことで、子どもの温かさ、動かす手足、呼吸を直接肌で感じ、それまでの不安が二人の子どもと変わらない新しい家族であることを確認できたことが、「親近感」という言葉に表現されていると考える。出産の喜びを感じる間もなく、混乱した状態で父親としての役割を果たし、子どもとの接触の機会も限られた父親にとってのカンガルーケアは、肌を通して伝わる子どもの体温や動作が混乱した気持ちを癒し、母親と共に子どもと触れあう喜びを分かち合うことができると考える。

母親に対してのカンガルーケアでも述べたように、父親に対しても「欠落感をうめるもの」といえる。母子関係の重要性について述べた論文は多い^{9,10)}。しかし、母親のみのサポートではなく、父親自身も育児を楽しみ、かつ責任を担っているという自覚が持てるような援助が必要である。その意味でも父子関係が良好になるような援助が重要になると考える。

V. まとめ

1. カンガルーケアは直接肌と肌を触れあう触体験であり、母親の不安を軽減するのに効果的であった。
2. 同室の親子の状況が見えることは励みにもなるが逆に不安の原因ともなり、特に長期にカンガルーケアをできない母親に対しては細かな配慮が必要である。
3. 母親同様、父親に対してもカンガルーケアは効果的であった。

VI. おわりに

肌と肌の直接的接触を行うカンガルーケアは、母親が子どもと対面するまでの不安な気持ちを軽減させ、母親としての実感をもたらすなどの効果が認められた。また父親に対しても子どもを身近に感じ、愛情を深める効果があった。今後もよりよい親子関係の形成をめざし、より効果的な方法について検討していきたい。

<引用文献>

- 1) 小泉武宣：小さいいのちを育てる医療の確率を目指して、日本未熟児新生児学会雑誌，16巻3号，1-8，2004。
- 2) 堀内勁：カンガルーケア，助産婦雑誌，vol.55，No.3，47-53，2001。
- 3) 廣池美穂子，千々石由美，仲野典子，吉田美登利，大田紘子，白川嘉継，小松啓子：カンガルーケア導入前後の母親の育児感の変化—アンケート調査を通して—，第10回日本新生児看護学会講演集，日本新生児学会，98-99，2000。
- 4) 橋本洋子，堀内勁：カンガルーケア ぬくもりの子育て 小さな赤ちゃんと家族のスタート，メディカ出版，大阪，1999。
- 5) Bowlby. J：母子間関係の理論 1 愛着行動，黒田実郎訳，岩崎学術出版，東京，258-262，1983。
- 6) Harlo. H.F：愛の成り立ち，浜田寿美雄訳，ミネルヴァ書房，京都，215-219，1978。
- 7) ラ・ルーチェ・リーグ：母乳 このすばらしい出発，山本れい子，喜本倫代訳，メディカ出版，大阪，163-176，1998。
- 8) 平尾真紀子，渡辺裕子，荒井くるみ：対児感情評定尺度による当院のカンガルーケアの検討，第10回日本新生児看護学会講演集，日本新生児学会，122-123，2000。
- 9) ラ・ルーチェ・リーグ：母乳 このすばらしい出発，山本れい子，喜本倫代訳，メディカ出版，大阪，27-34，1998。
- 10) 福田雅文：母子の健康な心の関係の確立のための方策と推進，周産期医学，vol.30，no.1，2000。
- 11) 福田雅文，森内浩幸：母子の絆を深め，子育てを楽しめるための出産後のプライマリーケア，産婦人科治療，vol.80，no.5，2000。